

小規模校に通う児童の発達の傾向に関する調査研究

村上 瑞希 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究の目的は、小規模校に通う児童の発達の傾向について追究し、小規模校におけるデメリットを最小化し、メリットを生かした教育について検討することである。

2. 研究方法

1) 対象者：福島県内の小学校における過小規模3校と適正規模1校に在籍する4~6年生の児童計208名、及び4校に在籍する4~6年生の担任をする教員計13名を調査対象とした。

2) 調査方法：児童を対象とした、学校生活の様子を把握するためのアンケート調査と、教員を対象とした児童の集団をより詳しく把握するための半構造化インタビューによる調査を実施した。

3) 分析方法：児童を対象とした調査では、質問紙調査票の各項目について集計を行い、小規模校・適正規模校の2群間で平均値についてのt検定、またはカイ二乗検定を行った。教員を対象とした調査では、会話が記録された音声を書き起こし、学校規模に関連している語りを抽出後、着目すべき視点ごとに分析を行った。

3. 結果と考察

児童を対象とした調査では、異学年交流のイメージについて、小規模校の方が、肯定的回答が有意に多かった。教員を対象とした調査では、小規模校では、人間関係やイメージの固定化が起りやすく、クラス替えなどの環境の変化がない学校生活により、人間関係の構築や適応力に課題がみられる児童が多いと推察されたが、適正規模校でも人間関係の固定化は生じている様子が見られていた。異学年交流や小規模校同士の交流により、デメリットが補われている部分もあることから、小規模校の状況を一概

にネガティブに捉えるべきとは思えない。小規模校における異学年交流は、上級生の責任感や、上級生への憧れが醸成され、人間性や心の成長にプラスに働くという点で重要視された。教員の語りでは、小規模校の児童の雰囲気について「素直」、「真面目」という表現が多用された。小規模校では、変わらない人間関係により、お互いに気を遣い合い協調性を育てていると推察された。また、児童と先生の距離感が家族のように近く、先生の目が行き届きやすいことや信頼関係が築かれていることが影響していると推察された。

読書への意欲、先生との関わりに対するイメージ、自分の通う学校へのイメージについては、小規模校よりも適正規模校の方が肯定的な回答を示した。小規模校では、環境の変化が少ないことによって蓄積したネガティブイメージの払拭が課題とされるが、工夫によりデメリットを最小化することができると考えられる。

4. まとめ

小規模校では、少人数によるデメリットが指摘される部分はあったが、いずれも工夫により最小化は可能と考えられる。小規模校で経験できる人間的成長機会に、適正規模以上の学校に劣らない、十分な価値を見いだすことができる。

5. 主な参考文献

- 1) 文部科学省自民党資料頒布会(H.27.3.15) 自由民主党務調査会編1469号、公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き
- 2) 藤井宣彰(2006), 学校・学級規模が児童生徒の学校生活に与える影響, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 第55号, P.99~104